

社会的事象を自分ごととしてとらえる探究的な学習の工夫

—第3学年 社会科の実践を通して—

野田 一馬

帝京大学大学院教職研究科教育実践高度化コース

キーワード：探究的な学習 社会科教育 自分ごと

1 研究の目的

新学習指導要領改訂に伴い、小学校学習指導要領解説社会科編（2017）の第三学年の目標にも記された「社会的事象について、主体的に学習の問題を解決しようとする態度や、よりよい社会を考え学習したことを社会生活に生かそうとする態度を養うとともに、思考や理解を通して、地域社会に対する誇りと愛情、地域社会の一員としての自覚を養う」ことが求められている。このことから児童が、自分とのつながりを理解し、自分ごととしてとらえることで、よりよい世の中をつくるために自分なりに考えることができる力が特に求められているととらえることができる。

また、探究的な学習を行う上で中野（2013）は「解決したいと思う疑問が浮かんだとき、その疑問に関する情報を集めたり、必要な情報を整理したり分析しながら、疑問を解決していくことで自分の考えを広げていく」と述べている。

そこで、児童らに授業場面において自分ごととして参加できるようにするためには、自身の授業力の向上と合わせて、どのような要素が必要なのか、いかなる配慮が必要なのかについて検討を行ったうえで、3年生社会科授業を通して実践的に授業の工夫を行い、検証していきたいと考えた。

2 基礎研究

(1) 社会的事象とは

社会的事象について、森分（2000）は「社会的事象は、人物や集団の目的によって生じ、他

の様々な事象と有機的な関連を有するのである」と述べている。また、社会的事象は、「人間に関する事象」、「人間の行動に関する事象」、「人間を取り巻く環境に関する事象」と分類している。そして、大森（1993）は社会的事象を、「具体的な事柄や出来事である」としている。

これらを参照した結果、社会的事象とは「目的を実現・可能にするために行う、人間生活の営み」と私自身は捉えることにした。

(2) 探究的な学習とは

小学校学習指導要領解説総合的な学習の時間編（2017）では「児童は、①日常生活や社会に目を向けた時に湧き上がってくる疑問や関心に基づいて、自ら課題を見付け、②そこにある具体的な問題について情報を収集し、③その情報を整理・分析したり、知識や技能に結び付けたり、考えを出し合ったりしながら問題の解決に取り組み、④明らかになった考えや意見などをまとめ・表現し、そこからまた新たな課題を見付け、更なる問題の解決を始めるといった学習活動を発展的に繰り返していく」としている。

(3) 自分ごととしてとらえるとは

自分ごとについて、広辞苑では対義語の用途で扱われる他人事の意味から定義を行う。他人事とは広辞苑（2018）では「自分とは無関係な、他人に関すること」と示されていた。このことから自分ごととは自分と関係があり、自分に関することとする。

3 研究の分析

(1) 自分ごととしてとらえさせるために行った

工夫・活用した資料の有効性

今回の実践では、自分ごととしてとらえさせるために多くの工夫や資料を取り入れたことで、児童の関心や意欲、そして生活体験や経験を思い起こすために有効なことであった。

また、記述の中には「動画を見て、工夫を考えることができた」、「資料を見て、自分たちのことがまとめられていたので何が書いてあったのか気になった」という自分ごととしてとらえて考えている児童の姿を見て取れた。生活体験や経験では、「動画を見ることでスーパーマーケットに行ったときのことを思い出して考えたり調べたりすることができた」、「いつもの生活が社会の勉強につながっていることわかって気を付けていきたい」なども見て取れた。

このようなことから、本実践で行った工夫や資料は自分ごととしてとらえさせるために有効であったと言える。

(2) 自分ごととしてとらえることによって行う探究的な学習過程の有効性

今回の研究では、単元を通して探究的な学習過程を行うために自分ごととしてとらえさせることによって実現ができることを検証するために行ってきた。だが、分析の結果を見ると単元を通して探究的な学習と自分ごととしてとらえさせることの有効性があまり見て取ることができなかった。これは、新型コロナウイルス感染症の影響によってグループ活動やペア活動のように協同的に深めていくことが少ないことで探究の深さが浅くなることや自分ごととしてとらえさせることに重きを置きてしまい探究的な学習ができていなかったことが考えられることができる。

しかし、3・4時間目の実践の分析から、共通の体験として動画を見ることで自分ごととしてとらえ、探究的な学習ができている場面がみとれた。これは、3時間目の学習の疑問を解決していこうと自分ごととしてとらえ考えられている構成になっていた。そして、一回ごとの授業において、児童が各時間ごとのめあてを考えたが、児童にとって一回一回が独立してしま

い、つながりや疑問を自分ごととしてとらえることができない結果となった。そのために、単元を通して探究的な学習を行ったと振り返りの中で感じる事ができない結果となった。

4 研究の成果

分析結果から本研究の成果として、本実践で行った工夫や資料は自分ごととしてとらえさせるために有効であったが、児童にとっては自分ごとと探究的な学習のつながりが振り返りの中で感じる事ができないことがわかった。このような結論となった理由としては、自分ごととしてとらえるようにするための工夫に時間を多くとってしまい、探究的な学びや単元を通して実践を行うことについての研究が自分ごとに比べておろそかになってしまったためであろう。

また、自分ごととしてとらえることによって探究的な学びを行っている一部の児童を見てとることはできたことである。だが、児童が単元を通して探究的な学習を行っていたと感ずることができなかった理由としては、1回1回の授業が独立しているかのように感ずる単元構成であったのではないかと考える。

引用・参考文献

- ・新村出編 広辞苑 (岩波書店 2018年)
- ・文部科学省 『小学校指導要領 (平成29年告示) 解説 社会編』 (日本文教出版株式会社 2017年)
- ・文部科学省 『小学校指導要領 (平成29年告示) 解説 総合的な学習の時間編』 (日本文教出版株式会社 2017年)
- ・佐賀県教育センター 『小学校社会科教育』 (2018年)
- ・森分孝治 片上宗二編 『社会科重要単語300の基礎知識』 (明治図書出版 2000年)
- ・大森照男編 『新訂 社会科教育指導用語辞典』 (教育出版 1993年)
- ・中野真志 『探究的・協同的な学びを作る一生活科・総合的な学習の理論と実践一』 (三恵社 2013年)